

武江年表

荒
弟
古
書

一



リ 5
112
1



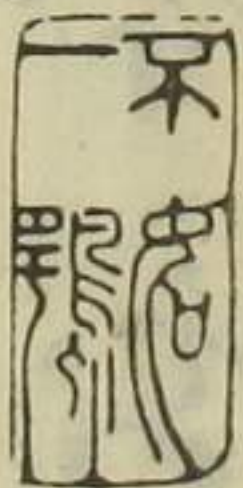
武江年表

江戸書鋪

青藜閣



武江年表序



龍泉大阿之塵。於豐城也。蔚紫之柔騰。誇斗牛之間。其威靈如此。而終出於石函。且雌雄似雜。嗚呼。何頭海。且聊。一。在哉。隆然。其。至。復。亦。匹於延平之津。則。其。我。可。為。知。

矣。其害一可益見矣。由是觀之。嚮
似可怪者。即足泉阿之威
靈。取以傳于萬古。而不磨滅。而
顯悔之取。關係為家大矣。豈翅
象。以凡物之有匹。自有其
數存焉。何桑受生。失得哉。
友人齋藤月峯。新到職之始。

著書者千種。既行于世。今
茲又著武江年表八卷。分
為雌雄。先取其雄。四卷。持
之。其為書也。自慶元鞞鞞
迄于今日。大之天災地妖。坊
街之沿革。世態之遷流。物
之權輿。事之興廢。小之少

武江年表序

人之生卒神佛之啓合龍及
風謠似談珠玩戲具經羅
不遺攬捩尤効凡二百年未
之事讀一往一來隨求隨
存族志受其易終而更無
繼豈無繼哉事勞缺掌操
觚不苟退待來日耳其至

如泉阿復匹至麟捲沙彩
光射波且生美可全又矣
其功可愈知矣然別此編
之雄鳴以待來日者取以
地雌雄相匹傳于萬古而
不朽也與其何憂之有須
日剗剗旋工發兌卜吉仍舊

貫乞方。朱亦不敢。薛便題
蓋辭。以為延平前。名奇云。
嘉永二年。屠維心。墨三月
上。游。

前山陣人源瑜



七十老戰驅觀鯨。彼扇藍
輿教太平。宮朝貶孫謀。臣列
國。日光高照海東城。
試神劍。羅并收。權二百年
間不動兵。官家今日真無

事、袋、霞、高、歌、唱、太、平
四月十七日作二首

右二絶句若文化乙亥夏

日光宗廟弗忘之辰鵬齋亮田翁
之作多親筆取以贈先考也予取
以弁於卷首云
月峯誌

提要

○慶元より巨降降平の化光世に被り穀下の甚思日不陪せり此故ふ
越酒僻境の人といとも十里を遠しせせ厥佳藤を着厥廣大と
作くともて郷土の父祖の名所國會ありて浪親の葉と一次に余ら
歳事記を編して亦予引て再此輯をふ一村淨聖壇のあり
在武都華の梗際を知りてむるの一助と云

○此編并載る所ハ中人以下の身月不離ると云ふて地理の沿革
或は坊間の風俗事物乃摘要と云ふるは獲る不隨て遠く素より
公認乃海軍の切知ると云ふはたぬく傳單せる事も採り入れ
たのり備せり

○是れ元以來新地を撰むるは決度列居の層部地を阻く而くは擁
守社民屋も地を編るる新小創一或は昔彼の香小羅りて廣を
畧小するの類もておふへりて扱升見算小者こくひて一二を

祀 彌細の事ありし編せり

○忠信孝士貞婦烈女の教忠賞を賜りしもの授受を遺ありし姑く新編小版せり

○新古書宮は蔵の作其代有名の書選率の年月此の書目見えたる所をりて二三を遺す貴人の子に傳りて多し編ね世永決の儀もまた遺漏ありし一凡此編小編より凡此約う法あり人抄本者押本等より同種編老撰射の墨所一は古書氏の思ひより日本書目を分る

○東武の人著以所の新編の書は半小汗一挿り充へて概く祀一凡し編小ありしとまはるは戸の事源名所ありしもの二三を撰りて水編上本の年序をあるは

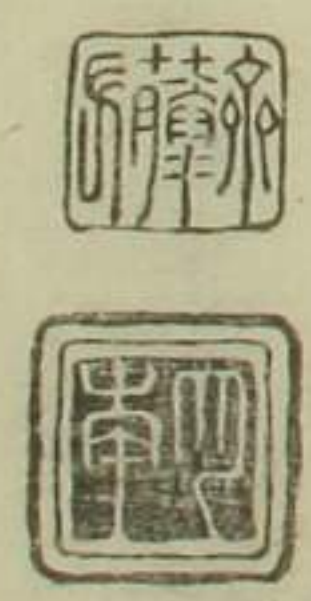
○此世の風俗を知ん人ありし書目見え其書選率事海合考より一々首く抄録・塵塚・淡澤海之話一言我衣織の然環塔の青抄録・城遊笑覧の系光骨董集等の冊子ありしとまはるは戸の事源名所ありしもの二三を撰りて水編上本の年序をあるは

○文化中編輯せる大沼書林と題せると本一巻あり他共本とこのふ詳大凡斯編の緯

裁小育りの書も古載り所事一四一に完結の物語らん之に余の撰りて又廉編より一十年歩百歩の機りをもとまはるは再撰書小の童謡信誼乃教近載りて此中も信りし抄りしをりて要とされと巻帳浩絶ありし事を感ひてありし省けり

○余固より浅見見かておろしは杜撰ありし一は書目見えを参考し蔵書の略定を添へ精微を尽んせし裁評の事を應りて今全編の類ありしとまはるは再撰書小の童謡信誼乃教近載りて此中も信りし抄りしをりて要とされと巻帳浩絶ありし事を感ひてありし省けり

武正三 新元辰申霜月吉旦 京都神田郡人 海友月冬書庫蔵



附言

東都市井の軍事業の始末ある旬日の間之事と云ふ
 中も忘失事跡のついでに東都の人とりて其の書
 據りて往事を思ひ出さる世勢の一説ともあるもの
 辭裁裨官ふつる心も坊間も裨益あるの冊あり
 此編全歌八冊あり天正十八年より始りし事
 詳書成候にても未割剛の切終りて其意を
 今更初候四冊をいふ事も後候四冊添て其行はる

己酉孟冬

書肆

青藤園誌



武江年表卷之二

天正十八年庚寅



今年八月一日台所よりめりて江戸の津城へ入らせぬ
 津城の辺葦沼汝入る地ありて田畠も多し
 川谷埋め溝を堀士民の不便を定むるひ
 といふ事ありて
 今年七月如來氏一滅亡小田原居城あり○事跡合考す



河入國の後日尔河津の鹽を江戸へ運送の爲波地より船の通流を
堀りぬるは是今の高橋の通ありと有り
天文より元龜のころは河津より小田まで
陸の年貢を納し河津に河津の鹽を積み

○八月平河天満宮 津城内梅林坂より 津城の北平河原移さる

○夏津勢の与市せりくる若狭親橋の辺
津城の北平河原移さる

風長藏永樂一落あり皆人死し
津城の北平河原移さる

○四嶋山度津寺
今平河原 小田系小田が今年小田系滅亡の後江戸へ

来り今の昌平橋の浪地を軍庫を営む
此時の住持を常安和尚といふは
津田頼房より移りて後實中今の

○天正の頃軍庫小田系風間といくる強盜あり黨を結び陣中
忍び入て盜を多し徳人おこりて今年より河をへり逃退し
小田系

終り
小田系

天正十九年 辛卯 正月 閏

正月冥八洲の徳家崇首の津安とて事始り登 城ありと云

○十一月軍東津社小津寄附願の津安をぬる
は時代浪一板九合

○十二月軍八州通用のさあ大判小判を造りぬる
は時代浪一板九合

○小田系の靈風山神徳寺今年後町へ移り後赤坂一ツ木へ移る

文禄元年壬辰 十二月八日改元

津城の西北の地大津若組宛宅地をぬる六組に分ちて一番と

六番までの名目あり
尾より番町

○田島山並頼寺天正十八年小田系より河をへりぬる

本館町の地小寺院をぬる
是より元年又順田町へ移りて明磨の災後津安へ
移さるるは河のたつては河へ移りては河へ移りては河へ

波地の高岩も次子小田系へうりて若系傾城町の軍人志志ちあふ小田系が小田

一其の子あり父果て後小田系落去ありは今年十五方ありは家来の外抱

をいすなり河津のりの子ありて居候しはは長の後傾城町軍基のりをぬる

友誼を以て廊をひらけり尚え和の件小治るせり又小田原の豪家松田もたは
友嘉明人小又靈香といふ服茶の方を授りてか如家友亡ひて後江戸小治り
本町丁目小治りて彼某と佳くふ小大女孩
ありてはる今ハ他人の家より製せり

文祿二年癸巳 九月閏

天正十八年の後品川一寺地をぬきり一日照山法師尾山英登今年

道三河屋天和三年作川 ○惺窩先生旅寓の室

我有 台命を傳ふ貞觀政要を讀まし一困唯四景我有解のふを

暇りて東軍の遊遊は素とら士が武野燭田流波を云々又ハ先生文集小

たらあきあうくやと歌をゆりゆむ於の月の東海の北々々

○天正の頃常陸國江戸崎中りふ取小治る徳忌一羽と云兵法の女ん

あり土子泥どうまひそまこ家根根者ねぎ菟角と云てぬを得える女子二人あり

徳忌者病の時菟角のそ病人を見換て逐電ちくせん江戸へ來て徹磨流と

名付一派を起して女子多く随一上見ぬ徳忌の勢ひを以て一羽と

二年さう病死しり友人の女子菟角が事いまいちを以て孫情り友

人の内江戸へゆりて菟角を討うちべしと後一寇くわをとりて小徳小あり

うの小徳江戸へ報く泥介ハ困ふ止り麻島の社小菟角おつが酒いのを祈る

小徳江戸ゆりて文祿二年九月十日日本橋より菟角小治つやあひ

り官府より此事を以て刀根屋を預り木刀の仕合しあひを以て

一か友人木刀を持て立合りる菟角打負うちまりて返電ちくせんして

行方を知しるいぞ以上如家代記の文を畧し中尾菟角編の表裏小治りて

同三年甲午

九月千坂大橋を始て掛かり

橋板はしとありあはり橋板倒たふして船を斃なし船中の人あり小漂こ小治こ徳忌とく時とき現げん小

新のそ渡地
まといひ ○今年米穀豊饒あり

○小田系不老山壽松院今年凶地不獲させしれ今の頼治橋の凶地
とる流をぬくる後年神田柳系の辺へ移り又後年へ移る

文禄元年乙未

武蔵小判蔵 光次と書書以武蔵と
渡河を不劣造せり ○小田系當知山本誓寺江戸へ移り

ぬひ日以谷橋所町の辺へ地をぬくる後年喰町の辺へ移り天和二年
の後今の地へ移る ○芝又長見安集云舟町と日市のぬひふらひ
さた橋只一ッあり是ハ渡河の橋あり文禄二年夏のたつらけ橋のり
あとの残籠を始末を永年移りぬるありしを

官府へさしぬるありしけ橋を残籠橋といふとりのあるは日市町
兼日市町ハ今の残りの橋のありしを一物あるハ

慶長元年丙申 七月間 七月二十七日改元

一步并小判金始て通用 芝又長見
といふ ○六月十二日系所蔵内并東法皇大
聖又永免障 芝又長見
に五寸 ○同七月朝鮮人來渡 ○同十二月大地震月と途々
止り ○渡河基を築くる ○多田宗玄といひ人靈告をさかりて系所
東山の辺より某所像を持下り奉庄ふ安け今の多田の某所あり

○税町常仙寺宗基安某所を安と

同二年丁酉

邪田不光那山感應寺宗創 邪山日感上人ありは地不詳然七年
ちを建つ今若沖ふ支那田感應寺といひ

同三年戊戌

松平為後と渡河より江戸渡河基の下へ移る 後寛永十八年
ぬり今の渡河へ移る
○八月三縁山坊と寺日比谷より今の地へうつる ここら今のヤス
のよ南日比

谷町の方より一とこの田をひや町とりむるハ湖入の地小一と漁人海中小枝竹の竹を並べ置く思の入口を閉て丸くこまをひびとひび字を今も海苔をよるよひこまを用ひひび字をよるひびの住居の地あまひびや丁とりり後其はふりりきりてもひびや町と号しけり後其は口とありてむす青町孫たう町等町もは地味ありとて

○横江泉養寺宗剣 ○十月令風山高林と後河骨子於て宗剣あり

後年約込と相店へ移る

慶長己年己亥 二月四

旧月令別山純室子天 神田養尔宗剣 寛永十二年

○始て系於小徳司代を更る ○池上奉門と大塔建立 聖年より

小判小光次と墨書せしを極中こくちゅうに改し 光次は徳宗の名まあり ○六師橋再建 再建

同六年辛丑 十一月四

八月大小判提銀の形制を定めぬ 後河内戸 大急銀もけ時より ちかま

○貞綱政要板成 孔子家語武強七書板行せしめぬ 清治世以来の刻本

○安南始て奉書寛永九年より通洛石迄東埔塞始て奉書寛永永

己年の后地より小呂宋始て奉書寛永十八年迄今年より寛永十九

年まで二十二年のる済米平船とて我必く商人亞馬港ノヒスハニ選眾安

南呂宋木の國く小年毎不行て六高賣一冊亦も和不行く高小

本年く不絶とあり 以上茶屋雜

○十月十六日大地震房總の山を崩し海を埋丘と成又海上俄り潮

引きて二十餘町干涸と成る十七日潮大山の如く巻上流死駁

○十一月二日己の刻後河町事く悪疫より火を以て此大焼亡小江戸町

一字も跡く人多く死す早先町中系尊友火事絶は序小始

板葺ふふはつたより 官厨より合せしむるは町中とては板

葺ふぬるふ小腕山孫次郎を備へし其の徳人小秀を備へしとて

海道表柱より羊分丸を葺後半分をばけり葺より皆人少治

りり本町二丁目の勝山孫次郎を備へしを羊分丸を葺よりさても

治りりや奇物中の人ちびりり異名を羊分丸孫次郎とて是は江戸

丸葺の始あり 以上考を
尺笈集あか

慶長七年壬辰

右泥船の奉書長十一年と 系属難
伝小

○小石川五量山本徑より新菩提寺と成傳通院と号し殿堂皆坊末清建

言あり榮家をおり

同八年癸卯

今年江戸町刻を命しり長見は某小日本六十餘州の人歩と

よせ神田の山を崩さ 今後河巻の
東南あり 南の入海に方二十餘町埋せしを

を直させぬ 是まぐら大々小治の辺八代海河原乃三河原の邊齋町の邊某町を
連りてありしと云 村あり南傳了町小傳了町八代田村の内あり大傳了町と宝田村のうらありしとて

る代田宝田とも小今の村の代田の邊ありしとて後田村の幸右町浪町の邊之橋田

村の今の橋田内つらありしとて 神也ふりり赤坂一ツ木の町をふりり天正十九年の

を古くは打入の時ありしとて 神也ふりり赤坂一ツ木の町をふりり天正十九年の

るあるとて或古記小見えりり之河町江戸法打入の初三河をより小人を古き代

不強者の地を置りてふりり神也ふりり赤坂一ツ木の町をふりり天正十九年の

せりり後小町を改りり古名を置りり神也ふりり赤坂一ツ木の町をふりり天正十九年の

を更の屋敷ありしとて後小町を改りり古名を置りり神也ふりり赤坂一ツ木の町をふりり天正十九年の

平川村ありしとて平川とて流あり今の江戸川流す橋筋よりあり橋の上の一方より

版田町下魚板橋の西より一ツ橋のわき東の流自浪町神田浪町の方へ流し今の

流筋橋も平川筋ありしとて平川の流を隔て北の方神田は流筋橋もありしとて今の流筋

筋も平川筋ありしとて平川の流を隔て北の方神田は流筋橋もありしとて今の流筋

筋も平川筋ありしとて平川の流を隔て北の方神田は流筋橋もありしとて今の流筋

東より見ゆるけむはしらの島乃江戸うらわ水とひらりの南田川あり

○閏二月朝鮮信使初来聘 正使長祐右副使 慶選集丁好寛 ○八月八日客星現於

慶長十二年戊申

林道春先生 濟儒若小命付るる世時と先生後乃在り

同十一年 己酉

二月に日月の容方ありしを現る 皇幸代里會小方形 月出満没如菴

○二月島津侯琉球を征へて仲山王尚寧を將ひ來るる

○八月阿蘇院始々入貢奉書 唐船始々來

○湘草所副林 一説元和元年ともいふ ○秋品川海舟船通山際より海始々二十

乃所乃道幅を度けり 是れ還自付とある

同十八年庚戌 二月閏

芝愛宕権現本社舞殿閣門石階未法建立 田福ちもこの時建立と元和二年の丙辰紀行本始々つららの初ありとあり

○蝦町不知足院法建立 後持院の 田福あり

○七月十九日勅へ坊上寺十二世貞蓮社源峯上人 ふたつせんちこー

○八月琉球始々後府并江戸 濟城へ入貢王尚寧奉書

○官醫吉田宗翰卒 其子宗達又良医のゆゑあり大橋宗桂も宗翰の男あり其書國式一巻を著け

同十六年 辛亥

正月二日竜口蒲生侯涉藩失火門外仙人羅漢の彫物ありて災孳

ありしを世時焼くると ○琉球聘使來 ○京より外 耶蘇宗再設

○龍徳山雲光院阿茶局建立 了喰町の 燒あり ○六月廿二日加藤肥後も法正卒

○官醫養安院正徳卒 正十七年養安院の長山松平の人あり曲直原及この門人より作の燈を冒して其十年に及んで官医也

あり後俸を賜ふに山小瀬へ別荘を遷居す

白く（髪）この刀を拵又鎧をのり女らよき人とかんるが髪元を拵して
 巾（髪）け髪を衣の巾（髪）も総込上（髪）ふ家うらぎ（髪）〜り帯の男の革帽（髪）と同じ
 常の女の前髪を眉の上ふある夜ふ如く前さぬも前（髪）の髪た下ハ
 おきたぬくおねて襟（髪）の境ふあり首飾の類を拵て帯（髪）衣後（髪）うづき
 の衣（髪）拵拵さぬ〜あれ〜〜襟（髪）のろふ花を拵てあり上（髪）忌横筋を
 細く色〜拵て色拵り〜〜中ふ小紋拵つるも見ゆこれハ
 練緯（髪）又襟（髪）も有べ〜杖（髪）の女の改ふりありおちく長柄の傘を
 拵き又（髪）色〜の指（髪）を續合する袋を負（髪）たり是ハ衣後（髪）の横筋たより
 又女の着ハ市女（髪）道（髪）の巾（髪）ふり〜布（髪）を二布（髪）合（髪）て燈（髪）つるを後の〜こふ
 鹿（髪）下（髪）まて巾（髪）あり又巾（髪）敷（髪）を道（髪）の巾（髪）敷（髪）のたふ肩（髪）の〜まて
 さげつるも巾（髪）敷（髪）帽子（髪）をうらり〜りもあり又男（髪）の肩（髪）衣（髪）拵拵（髪）ひび

あ〜小社の如く〜き合（髪）て忌級（髪）取（髪）の巾（髪）小横筋（髪）を拵〜り昔ハ武士ハ又ハ
 総髪（髪）の若老人（髪）もどハの髪（髪）下（髪）〜多〜天和貞享（髪）の以（髪）ま〜もき〜有（髪）て拵
 毛（髪）後（髪）も拵〜見（髪）ゆ又（髪）髪（髪）せ（髪）ハ意（髪）〜るもあり〜

元和元年乙卯

六月閏 七月十三日改元

古田（髪）服（髪）拵（髪）拵（髪）社（髪）速（髪）立（髪） ○六月十一日古田（髪）織（髪）部（髪）正（髪）年（髪） 一改六年 庚申（髪）ハ

○六月十五日山生（髪）漸（髪）お（髪）渡（髪）か 練物（髪）拵（髪）拵（髪）市（髪）津（髪）城（髪）内（髪）ハ〜 大付（髪）町（髪）古（髪）敷（髪）下（髪）
 あり〜〜市（髪）津（髪）會（髪）者（髪）お（髪）も（髪）身（髪）協（髪）町（髪）山（髪）後（髪）前（髪）の實（髪）承（髪）中（髪）地（髪）取（髪）を拵る所（髪）ハ
 此（髪）地（髪）の〜極（髪）々（髪）も春日（髪）の局（髪）あり山（髪）生（髪）社（髪）〜 附（髪）屬（髪）ありて山（髪）生（髪）社（髪）〜と云々

○小石川（髪）白山（髪）権（髪）現（髪）社（髪）勅（髪）清（髪）り春高（髪）地（髪）ハ今（髪）云（髪）津（髪）殿（髪）孫（髪）の肉（髪）あり〜と拵
 兼（髪）惣（髪）ふ（髪）ゆ（髪）今（髪）の地（髪）ハ拵

同二年 丙辰

神田明神（髪）社（髪）神田（髪）橋（髪）内（髪）〜り湯（髪）島（髪）ハ拵（髪） ○藥（髪）去（髪）明（髪）神（髪）牙（髪）延（髪）津（髪）内（髪）拵（髪）今（髪）の

元和四年戊午 三月間

江戸濱幕より 江戸を焼く事あり 今の江戸幕府の
辺ありといふ ○日本橋津東興

○江戸城の辺より火火標田迄焼く ○十月家の刻長雲が 禁裏が

○月白の勅堂津再建十一面觀世音を安んずる事 山形を以て

あつて 中興山秀
算修心あり

同又 年 己未

夏より冬まで入りて毎夜白氣東南を牙の角の如く長敷十丈又

禁裏を赤くあつて火火の如く

○又月より八月まで大旱又穀也といふ人多く死す

○大坂津を書始 ○長谷川其美と云ふの病久保八幡を境内より

時鐘を割後 延宝中甚切也といふ ○九月十二日櫻雲先年

九十九方門人林道春はけりいも又あり名波及田増は云
麦不凋菴ね永昌三之宅齊 齊大もの世不ひ

同六年庚申 十二月間

後醍醐山普門院隅田川の辺より 飛戸村に移る ○二月十日後友 代

光孝事 九十二方 ○十一月二日増と申中興觀智國師入寂 七十七歳

○江戸津を焼始り 建 ○日本橋を焼せしむ 其陰の如く焼せしむ
なり日本六十餘段の法度

此を焼く事あり 此を焼く事あり
日教六十餘段の法度

同七年辛酉

二月觀世を一代能真行を揚新東洋

○九月廿二日小増遠州度上京後段は 朋友をよめるの候とて津京

川の舟より酒舟を奉ると送る事あり

為り来んとしあるもわたり一人をさしめし世の如くあり

○十二月十二日織田有樂兵衛

七十才恒居の町をえび新屋町と云ふあり有樂兵衛恒居あり一あり

元和八年壬戌

活所遺稿

壬戌元日遇雪

雪隨世事正紛々 閑座牕間東武春

諸葛青蓮開隻眼

笑而不答當時人

○十一月源通村に昇東山下向あり古紀行を定東海道記とあり

十一月十六日

活所遺稿

活所遺稿

同九年癸亥 八月閏

正月朔の復遠澤郡統邑徐動溪第と云ふ觀音堂のことに書を

寫す

○正月又日智雲白道情隨意上人寂

七十に及ぶ人な世の俗を離れ

此の名号を尋ぐて其の事を知る

○芝居と云ふ山門津再建

○十一月十六日幕所本因坊日海寂

六十に及ぶ事あり

世年間記事

女奇癡妓を捕せしれ男奇癡妓と云ふ

中う奇なりか遊女あり捕せしるを

捕せしるを

○幕所一月と云ふ葛西と云ふ幕所と云ふ一二三に及ぶの地を掛

海沿せしめり

後徳

寛永元年甲子

二月晦日改元

倭勢倭難衰と云ふ長官おに市奴太神をいふ日事橋通と云ふ

おのふ同十年ふありふの地

雲原町

代地 延慶と云ふ

○長徳法印靈愛を感し永代高小八橋官を勅法と云ふ

真あり ○目黒村不動堂石再建 ○淨西把孫重復

○東叡山實永寺御建立 關山慈願大所あり 本海會考ふは地は後堂を建

後堂の地は後堂の御あり一後堂殿をさくくし御あり云々を思ふくし御ありのみ唱へたり一永くこの地の名をなれり云々小波照高社に今の東叡山の地あり一を以時今の地を稱さる又比叡山故中の名をさくくして入道村の町を故中町と号す

○道平山堂巖と宗刻 以時今云々巖高の地之権管を其後上人能

○明心志が助寄を撰と号 以時今云々巖高の地之権管を其後上人能

○二月十五日より中橋より於て中村勸之高く奇為好むと云

中橋より於て中村勸之高く奇為好むと云

○十月十五日小柄宗徳神格現社改の扉より於ての二字現はく二百あり

中橋より於て中村勸之高く奇為好むと云

○十二月朝鮮人來聘

正後通政右支郎左副使通 劉道安姜弘重張事辛慈榮

寛永二年乙丑

湯島小幡禪院創立

湯島小幡禪院創立 天沢山禪院と改む春日の馬山善境なり馬山實永廿年

○南八丁堀一丁目より一丁目社を舊社あり

南八丁堀一丁目より一丁目社を舊社あり

○八月猶射一堀大工のり 八月猶射一堀大工のり

八月猶射一堀大工のり

○二月より八月を法皇昇殿

同乙丑 丙寅 四月

○二月より八月を法皇昇殿

二月より八月を法皇昇殿

○耶養宗再獲 ○九月上野小

神祖神宮神速立 二歳半おどろのは是建さるり武太公左殿山の
洗馬岡長尾と居せしうらふ今もあうりりり

○十月吉野又町のあく今一普徳殿 今も引継一町あり
すみ町を築のすも町あり

○武蔵志料を實永永記を引て云實永二年十一月十日烏丸大納言
光彦は中向の序は戸田町を築りあひり一頃平親生の古墳
あるを見ぬあひて一頃平親生の後初初の後中久一りれい初免あらん
本一を養國ありり二月九日初免あり一り一初田の社内子
まろりりけること云く 梅のふえ和二年存しはせの両辰宛は小林田社の平親生の五
を初めと一記とて一りり初免ありり記とて一りり初免ありり

寛永二年 丁卯
二月源通村は中向あり 成宗瑞砂山真雲寺
諸岳和向くきり

○東叡山仁皇門常以事法苑寺 二ツを
経聖多宝塔寺神速立 は時法堂
宇津佐

○八月八日愛宕山権現社火 災後再
法蓮堂有 ○八月波あり

○大地震 ○十一月信伽古来 後の名を
理伽ト云 ○新羅より琉球へ渡り一西丸 すんぎ
の種薩州へ始る海了 さう南編の頼椰子小西丸は二十年來のちありあ
あまのいりりあてた万治實文の以よりひき一あり

同又年代辰
正月二日系橋紀伊守屋又吉まよりりありの元來一毎事あり一り大伴
河系弘治大伴の示現を蒙り六字のふん号を書けりりて二月廿一日
ふん号を書りて吉事一子牌を書りり 聖徳御成徳寺と云

はら民名のむす子

江戸味噌を二まのすりて一まのひみそをまじりのるに

○今年とり武家くこけ番を並る場ふ終てけ斬あり一取を

寛永七年 庚午

正月八日隅田川あて

古塚の志う一杉柵あつらひさむくをむ着く一廊く 持成は伝

○二月十日日醫所甲斐池奉奉 百十七ヤウウウウ色のまめて後り一ヤ作
直武彦の男をまじりあつらひの

連平一後十六歳と吸あつらひ
とる著述の医を柵をまじり

○二月小湊誕生寺あり一布引祖師
像年以事あつらひ

○二月二日身久遠寺日蓮池上奉門寺
日樹宗海日樹伝及版田小配流

○同廿二日大地震免降

○八月山王社法造堂
魚籃觀世音之田の地安重

○十二月廿三日大地震は刻光初光行

同八年 辛未 十月國

三月十九日江戸中不降降

○二月二日法華寺の上

○東叡山小大佛像

○八月大風家屋を壊ち樹木

○十月十日後反氏不代池

○十月十七日上野大石焼落

同九年 壬申

諸家深秘録云今奉とり英及仙臺の茶穀始多江戸一也今
下江戸之六英及茶のはありては令一也あて七之江戸領あり

○平塚明社社神速立社奉至く後就次

○高年より山王法事禮納り大祭奉禮と成り

○室林山養必寺院町代地とて田の谷と成り

○七月琉球人來聘 正使佐敷子金武王 あり 正二条と成り ○村山又之助其之居暮野町下

於て始て其の 市村羽左馬 祖ちり ○八月八日或る夏の法事の室 おきんのむ 正二条と成り

齒をあらひぬひ終ふ今日終り せんたう おひだん 終つて送るありてむ おきんのむ 正二条と成り

馬を若くを新く ちり 相ひあふ 版倉屋とて正二条あり今も 異議をたのみの多しと成り

○明人安計 後池の 上より 江戸日本橋安計町をぬき又お州三浦遠見村を

願て其妻妙満尼今年七月十六日終遠見村降土す せんたう 不墳墓あり

安計の忌日 不墳墓あり 禱ふ禱ふとて せんたう

寛永十二年乙亥

正月廿五日寅卯刻大地震年未刻又地震あり ○後府山古宮始り

○春鳥丸大船先座 うらひら 今下向あり おのの 記を春の曙 おのの

又源通村 せんたう 下向あり

春 せんたう ぬきの葉も せんたう ちり せんたう ちり せんたう ちり せんたう ちり

○安定丸の御船降 せんたう ちり せんたう ちり せんたう ちり せんたう ちり

○二月天台院 せんたう ちり せんたう ちり せんたう ちり せんたう ちり

○六月十二日大風遠呂豆丹海海の船八百艘被損 せんたう

○七月天 せんたう ちり せんたう ちり せんたう ちり せんたう ちり

○八月 せんたう ちり せんたう ちり せんたう ちり せんたう ちり

○八月廿日 せんたう ちり せんたう ちり せんたう ちり せんたう ちり

○八月廿日 せんたう ちり せんたう ちり せんたう ちり せんたう ちり

○八月廿日 せんたう ちり せんたう ちり せんたう ちり せんたう ちり

海ありは本梓あり
さき世下稀あり

○十二月朝鮮人來聘

正使白藤任統副使東濱合世源
從事青丘英床 張版本抄之

武江年表卷之一 畢

